

今週のコメント

- ・ クリプトスポリジウム症の報告が1例あり、これは平成11年4月に感染症法が施行されて以来、本市で初めての報告です。本年第26週までの全国の累積報告数は、この1例を含めた3例です。また、平成19年の年間全国累積報告数は6例、平成18年は15例です。
- ・ 麻しんの累積報告数は72例です。第21週から第24週までは15歳以上の割合(78.6%)が多く、第25週からは15歳未満の割合(85.7%)が多くなっています。
- ・ 手足口病の定点当たり報告数は2.05で、過去5年平均値(0.92)を上回り、先週(2.07)に次いで、二番目に多い報告数です。全国では、報告数は増加傾向にあります。

今週のトピックス:<ヘルパンギーナ>

- ・ 第26週の定点当たり報告数は0.98(40例)で、第23週以降、増加傾向が続いています。詳細をトピックスに掲載しています。

発生状況

全数報告の感染症

- ・ 二類:結核 3例(喀痰塗抹陽性 1例,無症状病原体保有者 なし)
【1月以降の累積報告数 179例(喀痰塗抹陽性 59例,無症状病原体保有者 14例)】
- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症(O26 VT1) 3例【1月以降の累積報告数 22例】
- ・ 五類:クリプトスポリジウム症 1例【1月以降の累積報告数 1例】
- ・ 五類:麻しん 7例【1月以降の累積報告数 72例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68,小児科定点41,眼科定点10,基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.03	2
小児科 (降順5位まで)	感染性胃腸炎	2.88	118
	手足口病	2.05	84
	ヘルパンギーナ	0.98	40
	水痘	0.80	33
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.63	26
眼科	流行性角結膜炎	0.60	6

病原体情報

ありません。

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<ヘルパンギーナ>

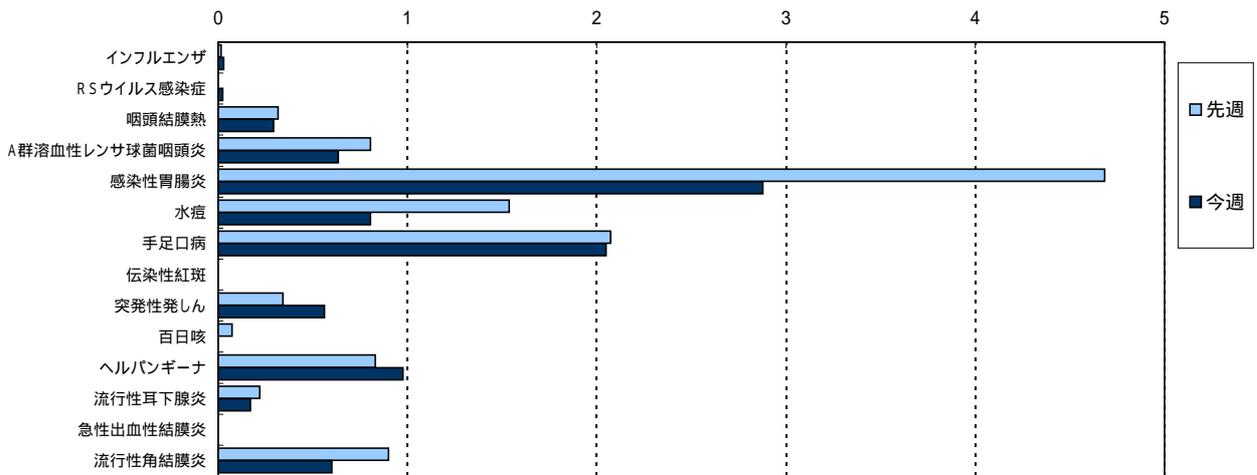
(注)京都市のデータは、平成20年7月4日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。

また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

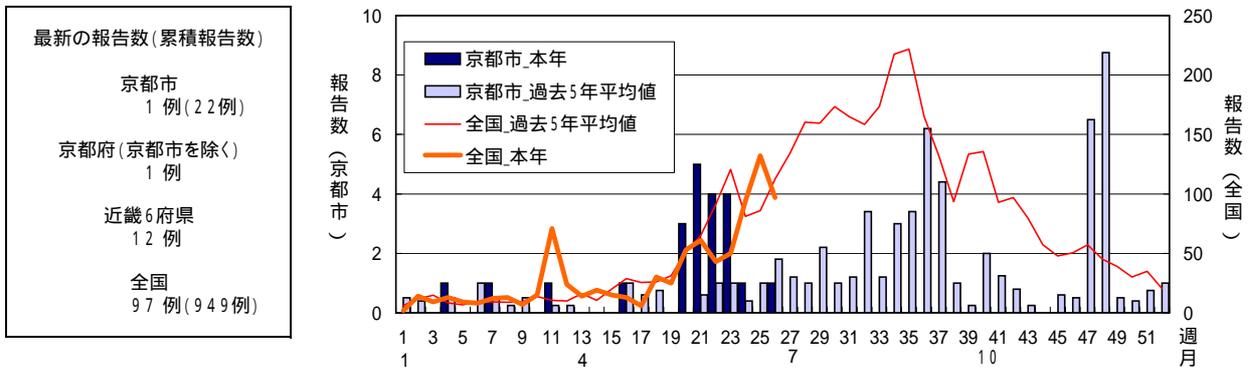
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

発生状況の概況グラフ

1 今週(第26週)と先週(第25週)の定点当たり報告数の比較

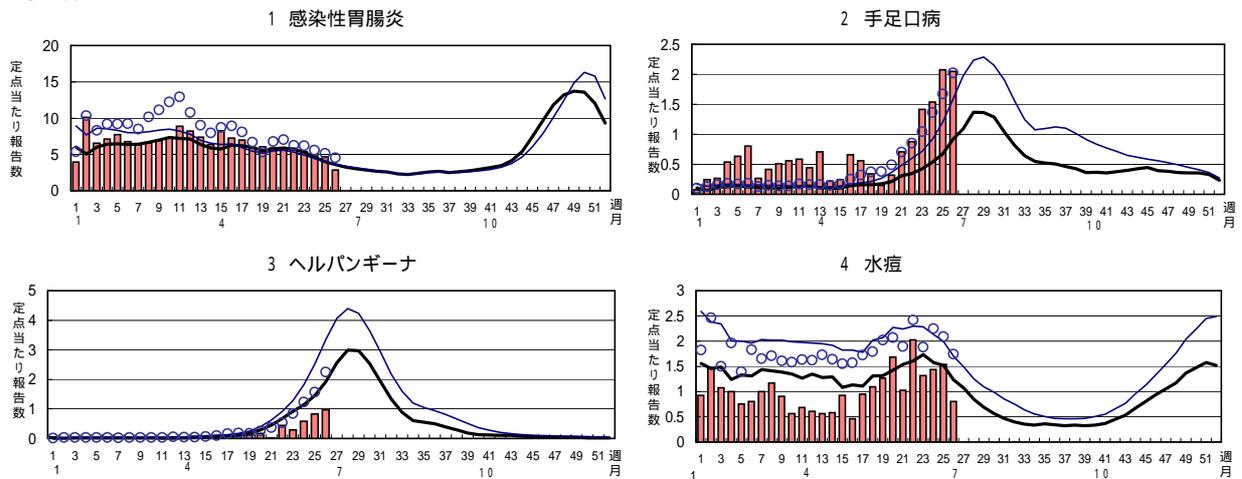


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

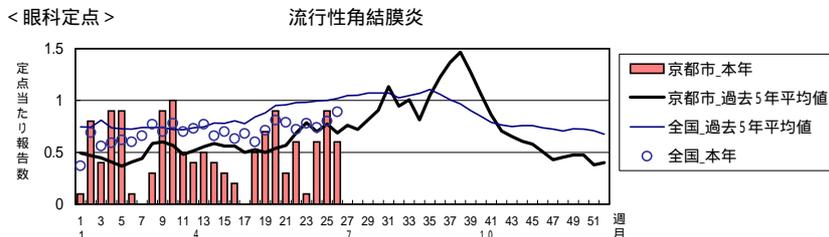


3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



今週(第26週)のトピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの第26週の定点当たり報告数は、0.98(40例)で、過去5年平均値には及びませんが、第23週以降、増加傾向が続いています。

ヘルパンギーナは、国内では、毎年、5月ごろから報告数が増加し、7月ごろにピークを形成します。

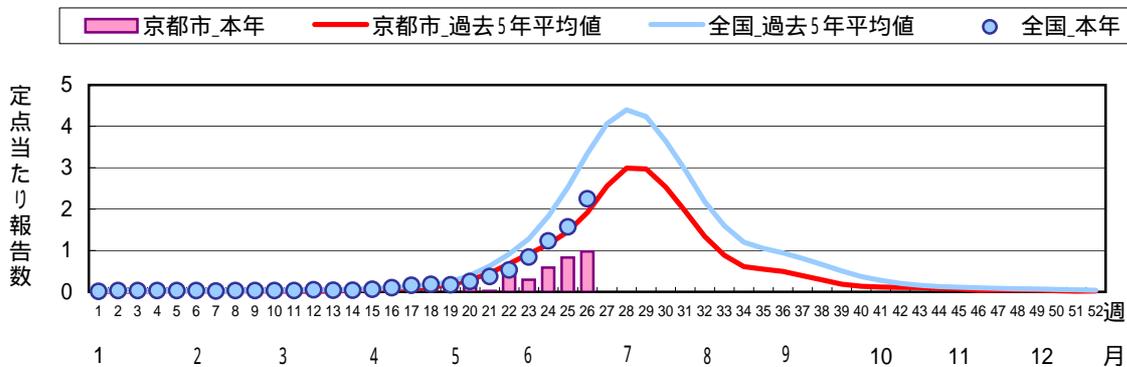
京都府の第26週の定点当たり報告数は、1.23で、47都道府県中、38番目となっています。

報告数が増加傾向をみせはじめた第23週以降の、本市の年齢別報告数の推移をみると、第23週では1歳と3歳が、第24週及び第25週では1歳が、第26週では2歳が最も多く、6歳以下に報告が集中しています。

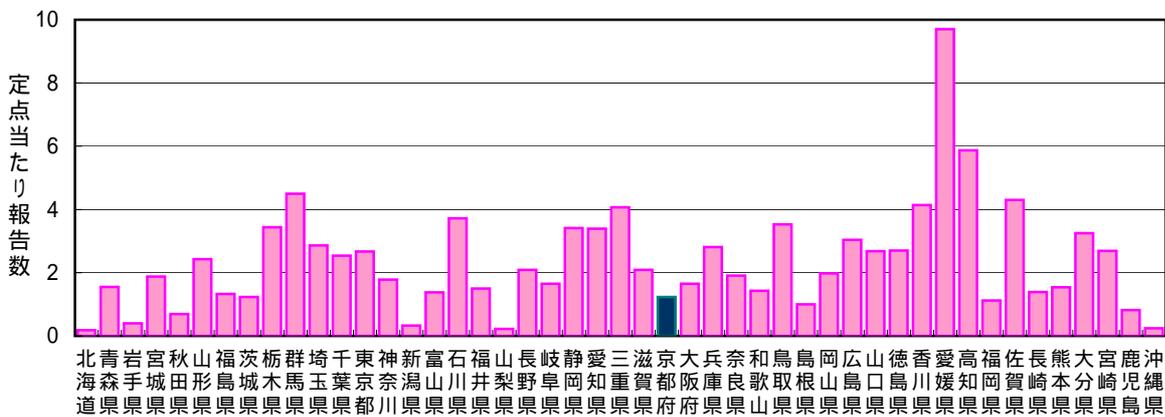
ヘルパンギーナは、A群コクサッキーウイルスが主な病因となりますが、本年については、7月3日現在、国立感染症研究所感染症情報センターの病原微生物検出情報によると、ヘルパンギーナ由来ウイルスとして、コクサッキーA群2型、16型が、多く検出されています。

(<http://idsc.nih.go.jp/iasr/prompt/s2graph-kj.html>)

定点当たり報告数の推移(平成20年第1週~第26週)



都道府県別 第26週 定点当たり報告数



本市の年齢別報告数の推移(平成20年第23週~第26週)

